



添田町では10日午前3時40分ごろ、土砂崩れが発生し、住宅1棟が巻き込まれた。住人の70代夫婦のうち夫は救助されたが、妻の死亡が確認された。

気象庁によると、6日の降り始めから10日午後5時までの雨量は、福岡県添田町で603.5ミ、佐賀県鳥栖市で490.5ミを観測。24時間雨量の日最大値(10日午後6時現在)では添田町で423.0ミ、福岡県久留米市で402.5ミと、それぞれ観測史上最高を更新した。

死亡が確認された。福岡県は市の要請を受け、自衛隊に災害派遣を要請した。福岡県広川町広川では10日午後1時15分ごろ「車が溝に落ちているようだ」と消防に通報。農道沿いの用水路内で水没した状態の軽トラックが見つかり、車内から70代の男性が救出されたが、死亡が確認された。佐賀県唐津市浜玉町では

10日午前6時15分ごろ、近くの住民から「山が崩れている」と報告があった。市消防本部によると、住宅2棟が土砂崩れに巻き込まれ、70代の女性が心肺停止の状態で見つかり、死亡が確認された。70代と50代の男性の親子の安否が分かっていない。

大分県中津市耶馬溪町の山国川では10日午前7時25分ごろ「女性が川に流されそうになっている」と親族から通報。乗っていた軽乗用車が見つかったが、50代女性が発見されていない。また、久留米市藤山町では「車が冠水し、運転手が車外に出る時に見えなくなった」と110番があり、現場で無人の車を発見。約3.5キロ離れた田んぼのあぜ道で男性の遺体が見つかり、福岡県警が大雨との関連を調べている。

国土交通省によると、福岡、佐賀、大分3県で遠賀川水系の彦山川▽筑後川水系の巨瀬川、花月川、小石

# 九州北部記録的な大雨

## 4人死亡 3人不明



3面に CU クローズアップ (社会面に関連記事)

自治体との連携 全力対応を指示 岸田首相

岸田文雄首相は10日、九州地方の記録的な大雨を受け、首相官邸で松野博一官房長官や谷公一防災担当相に対し、自治体と緊密に連携して対応に全力で当たるよう指示した。その後、官邸で記者団に「人命第一で対応に万全を期していきたい」と強調した。11日に予定通り欧州訪問に出発するかどうかは「明朝(11日朝)、被害状況を見極め判断する」と述べた。【森口沙織】

# 新毎日

7月11日(火) 2023年(令和5年) 発行所: 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 〒100-8051 電話(03)3212-0321 毎日新聞東京本社

資産や投資に 100gゴールド・プラチナ インゴット 販売・買取 手数料0円 日本マテリアル 0120-66-5610

### NEWSLINE

北海道南西沖地震30年 2・24



死者・行方不明者が奥尻島を中心に230人に上った北海道南西沖地震から12日で30年を迎える。

### 節電競う企業 6



政府は今月から東京電力管内で節電協力を呼びかける。企業が取り組む「デマンドレスポンス」とは。

### ワグネル反乱 続く余波 7

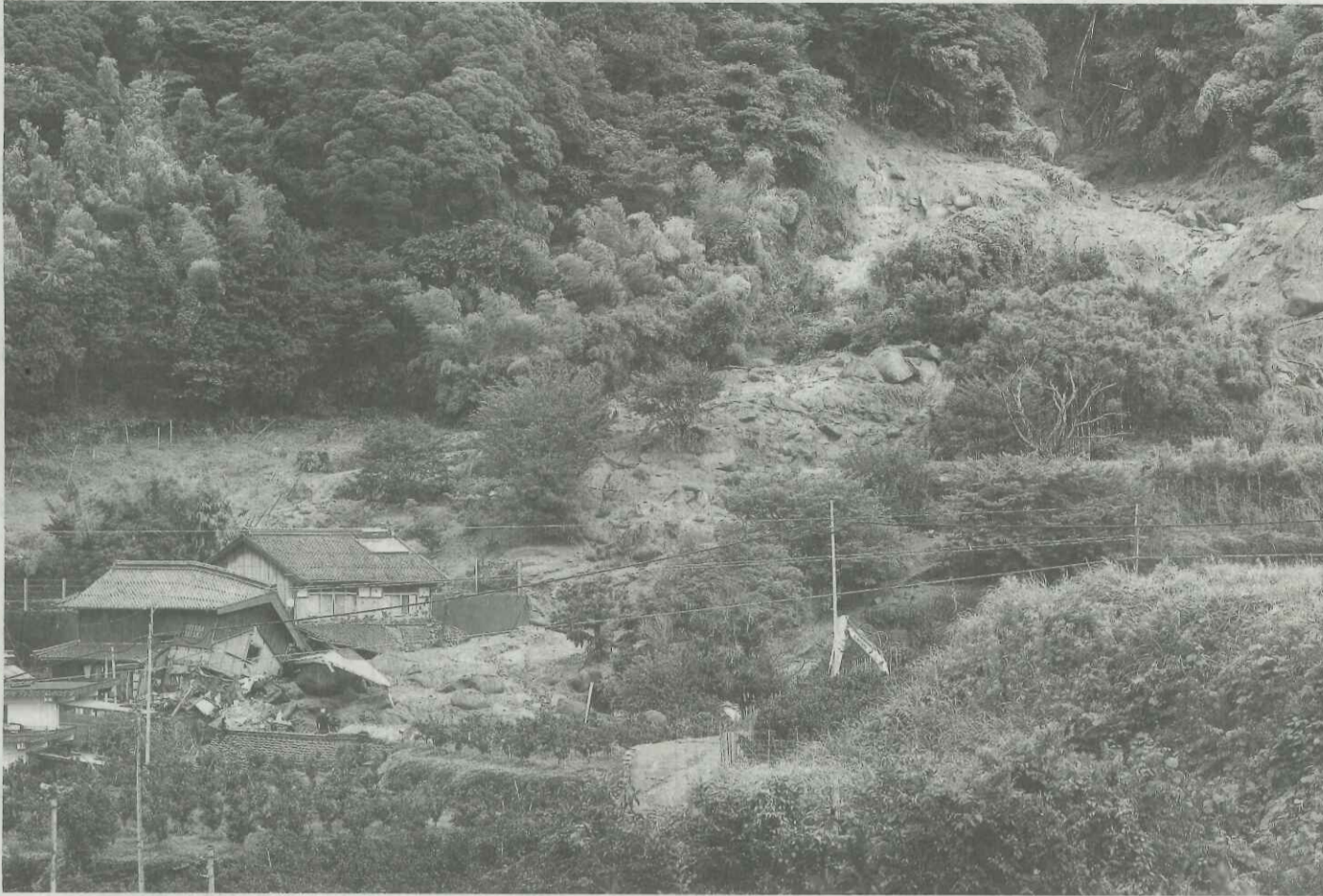
# 土砂崩れ 住宅襲う

## 「まさか」住民ら絶句

住宅を突き破る泥まみれの流木や岩……。10日未明に線状降水帯が複数発生した九州北部は記録的な大雨となり、福岡・大分両県に大雨特別警報が出された。福岡県久留米市では土石流が、同県添田町と佐賀県唐津市では土砂崩れが住宅を襲い、巻き込まれた住民らの捜索や救出活動が続いた。久留米市では広範囲の浸水も発生。住民らは大量の土砂や泥水に言葉を失った。

### 九州北部大雨

久留米市田主丸町竹野。広く山肌をえぐるように土砂が泥水と共に流れ出した



大雨による土砂崩れで住宅2棟が倒壊した現場—佐賀県唐津市で10日午前11時34分①土石流で大きな被害が出た田主丸町竹野地区。自宅2階部分と共に流され救出された東司幾信さんが、ぼうぜんと見つめていた—福岡県久留米市で10日午後5時5分、いずれも吉田航太撮影



跡が見えた。岩や流木が直撃するなどして付近の複数の住宅が巻き込まれ、消防などが流木などの障害物を撤去しながら、住民らの安否確認や救出作業をした。東司幾信さん(69)は土石流の発生時、自宅2階にいて、家が回転するような感覚を覚えた。そのまま10分近く自宅2階部分と共に流され、救急隊員に救出された。自宅1階は見当たらなかったという。

東司さんは3年ほど前、この場所に母親と引っ越し。父は無事確認。男性は「祖父は3時間ほど埋まっていたが顔の部分は空いていたことで助かった」と振り返ってきた。竹野にあった実家が被災した男性(38)は、親戚からの無料通信アプリ「LINE」で、祖父が土砂の流入した住宅内に取り残されたことを知らされ、駆けつけた。幸い祖父は助け出された。当時一緒に家にいた祖母と父の無事も確認。男性は「祖父は3時間ほど埋まっていたが顔の部分は空いていたことで助かった」と振り返ってきた。

た。添田町庄では10日未明、木造平屋の住宅脇の斜面が崩れて土砂が流入。この家に住む70代夫婦が巻き込まれ、夫は救出されたが、妻が死亡した。近くに住む70代男性は「発生した時間帯(午前3時過ぎ)はとにかく雨がすごかった。夫婦は毎日のように朝2人で散歩している様子を見ていたのが心が痛む。現場の家では5、6年ほど前にも倉庫に土砂が流れ込む被害があった。またこのようなことが起こるとは……」と話した。唐津市浜玉町平原では10日朝、土砂崩れで住宅2棟が倒壊。3人が行方不明に。10日午後70代の女性1人が見つかり死亡が確認され、残る70代と50代の男性2人の捜索が続いた。親族の男性(75)によると、2人は50代男性の妻と一緒に川の様子を見に行き、妻が用事で家の中に戻った間に、外で土砂に巻き込まれたという。親族男性は「少しの間で命にかかわることになった」と声を絞り出した。NEXCO西日本によると、大分道、東九州道、九州道の福岡、大分、佐賀県内の一部区間で、10日早朝から通行止めが続いた。JRは山陽新幹線と九州新幹線の一部区間で早朝から一時運転を見合わせた。【山口響、吉田航太、栗栖由喜、林大樹、五十嵐隆浩、下原知広】

ブリヂストン 生産一時停止 福岡・佐賀4工場

死者	不明
3人	0人
1人	2人
0人	1人

※10日午後8時半現在。自治体などの発表による

自営業の古賀浩幸さん(63)は、午前8時前、雨と雷がひどく、自宅前の道路を、川のように水が流れるのを見た。「ガラガラと音がして『石が流れてきよるな』と思った。玄関に出てみると、上の方は倒木や右でいっぱい。玄関前まで泥水だらけ。倒木があって車も出せず、人の手ではどうしようもない」と話した。

ブリヂストンによると、一時停止したのは乗用車用などのタイヤを生産する



大雨で広範囲に冠水した農地や住宅地—福岡県久留米市で10日午後4時23分、本社へりから上入来尚撮影

# 「予報以上」自治体苦心

## 避難指示遅れ「切迫感届かず」

10日未明からの九州北部の記録的大雨では、土砂崩れなどで複数の犠牲者が出た。気象庁は厳重な警戒を呼びかけていたが、雨量や降雨のピークは事前の予報からずれる形となった。線状降水帯の予測の難しさが突きつけられた格好で、自治体の避難呼びかけのあり方が改めて問われている。

## クローズアップ

### 九州北部大雨

「天気予報を見ていてもここまで雨は想定できなかった」。近くを流れる筑後川の支流、巨瀬川が氾濫し、大規模な浸水被害があった福岡県久留米市田主丸町。被害が出た田主丸中央病院の鬼塚一朗院長は振り返る。

病院では、午前6時ごろから1階部分が床上30センチ近く浸水。患者約50人が2階に避難した。電気と水が止まり、電気は非常用発電でまかなった。食料は患者用の備蓄しかないため、近くの病院に依頼して物資を届けてもらったという。

気象庁が福岡県に線状降水帯の発生情報を出したのは、午前3時9分。久留米市を含む筑後地方に大雨特別警報を出したのは午前6時40分だった。久留米市は午前7時34分に5段階の警戒レベルで最も高い「緊急安全確保」を市全域に発令し、市民の3割近くの約8万4000人が登録する市の無料通信アプリ「LINE E(ライン)」公式アカウントなどを使い周知した。

午前9時半ごろには、田主丸町竹野地区で複数の住宅が巻き込まれる大規模な土石流が発生し、人的被害も出た。市防災対策課の佐野理課長は「切迫感が届かなかったのかもしれない。線状降水帯が同じところにかかり続け、ここまで雨が降るのは想定以上だった」と対応の難しさを口にした。

土砂崩れで1人が死亡、2人が行方不明になった佐賀県唐津市では午前4時ごろから1時間に約80ミリの猛烈な雨を観測したが、市内全域の5万1235世帯11万6018人に警戒レベル4の「避難指示」が出たのは午前6時。土砂崩れの発生はその直後の午前6時15分ごろで、市担当者は「外が暗い時間の避難は危険が伴うため、明るくなるのを

待って指示を出した。雨がここまで降る予報は出ていなかった」と話す。土砂崩れで住民1人が亡くなった福岡県添田町も全域に避難指示を出したのは午前4時50分。緊急安全確保を出したのは午前7時20分になったからで、土砂崩れ発生約3時間後だった。

東京女子大の広瀬弘志名誉教授(災害リスク学)は「気象庁の予測精度は上がっているが、過小予測にな

## 線状降水帯の予測困難

「線状降水帯の予測が難しかった」。気象庁予報課の杉本悟史課長は10日午後5時に開いた記者会見で「これまでの大雨になることをなぜ予想できなかったのか」と記者の質問に、そう答えた。

予想では、10日午後6時までの24時間降水量が福岡、佐賀両県では200ミリ、山口、長崎、大分、熊本各県では150ミリだった。

だが、10日午前3時以降約7時間にわたり断続的に、福岡、佐賀、大分各県で線状降水帯が発生。10日までの24時間降水量は最大で、福岡県添田町英彦山423・0ミリ▽同県久留米市耳納山402・5ミリ▽同県朝倉市349・0ミリ▽佐賀県鳥栖市326・5ミリに達し、予想を大きく上回った。

気象庁は6月30日と7月7日、大雨について報道陣向けに説明はしていた。7日には「大雨災害の危険度が高まる」と「8～9日」について特に呼びかけていたものの、そこに「10日」は含めていなかった。

コンピュターを用いて雨量を予測する「数値予報」では、9日の段階でも10日にこまごまの大雨となる予測は示されなかった。

線状降水帯が発生する半日前に発表する予報も出すことができず、警戒を強く訴えたのは発生直前の10日午

前3時ごろになってからだ。気象庁の担当者は「局地的な現象の線状降水帯は、降雨のピークや量、場所をビタリと予測することは現状の技術では難しい」とする。

大雨特別警報は過去には台風接近中の場合、発表の前日などに「発表する可能性」に言及する「予告会見」を開いて警戒を呼びかけることもあった。今回そのような意見が開催できなかったことについて、杉本課長は「台風の場合はかなり前の段階で予想進路などをもとに特別警報に言及できるが、今回のようなケースは難しい」と説明している。

【安藤くみ子】